大森山公園、動物園の 持続的な発展に向けて

大森山自然動物公園整備構想

2009年、動物園を含めた大森山公園全体の老朽化への対応と魅力アップによる活性化を目指し、動物園と公園の再整備計画について有識者と市民代表との意見交換を行い、2010年3月「大森山自然動物公園整備構想」が発表されました。「自然と調和し、市民とともに成長し続ける公園づくり」をコンセプトに、5つのキーワード「自然」「観光」「教育」「環境」「協働」を整備方針に掲げています。観光資源を充実させたにぎわいづくりと動物のいのちを体感できる人間形成の場として、さらには自然環境へと思いを巡らす入り口としての役割を果たせるよう、公園と動物園を融合させた構想が示され、それに基づき、具現化に向けて少しずつ動き出しています。

1. 自然とともに息づく動物園の再整備

多層・多様・多機能な植生を再生し、自然に溶け込み、自然と調和しながら、動物本来の行動が発現できる飼育展示環境と人にやさしい施設づくり。

2. 新たな魅力による観光拠点としての再生

パノラマ展望台の整備と大森山を桜の名所とし、秋田公立美術工芸短期大学（現秋田公立美術大学）などと連携した公園のアート化。

3. 豊かな人間形成に資する体験学習の場の創出

希少魚類ゼニタナゴ保全池（ビオトープ）の整備やふれあい体験、環境学習の場づくり。

4. 資源循環システムの構築とエコへの挑戦

排せつ物の堆肥化や飼料作物栽培場の整備、太陽光発電など新エネルギーの導入による資源循環型社会、低炭素社会への参加。

5. 市民や企業と協働し成長し続けるつながりの構築

ボランティアガイドやガーデンボランティアなど市民や企業、学校などとの協働体制の構築を図った公園と動物園づくり。

動物園の活動 40周年の歴史の中で

大森山自然動物公園整備構想には5つの整備方針が盛り込まれています。整備方針は、これまで大森山動物園が実践し、広がりを見せてきていた様々な活動について、構想策定委員会による意見交換を受け、整理集約しながらつくられたものです。

40周年の今、これからの道標である、「自然」「観光」「教育」「環境」「協働」の5つのキーワードに添って、これまでの取り組み状況や活動の現状に、未来へ向けた展望も加えながら記録します。

1. 自然

自然とともに息づく動物園の再整備

大型猛禽舎のイヌワシ

イヌワシのひな

大森山動物園では、「いのちをつなぐ」ことを使命の一つとしています。自然を意識しながら、飼育し展示すること、そして種の保存が挙げられます。予算などの制約はあるものの、これまで整備を続けてきた王者の森、チンパンジーの森、さるっこの森、ニホンコウノトリ展示場などは、こうした基本的な考えの下に進められてきた整備です。その背景には常に大森山の自然がありました。特に秋田の自然と強く関わり、保全を主張してきた動物がいます。

一つはイヌワシです。1970年から飼育している最長の飼育歴を持つ動物です。大森山は国内最古の飼育歴を持つ動物園で、前身となる千秋公園の児童動物園時代から飼育を引き継ぎ、今の動物園を代表する動物でもあります。秋田、山形の県境に位置する鳥海山で保護された2羽が創始個体で、オスの鳥海は国内最高齢43才となった今も元気にしています。

イヌワシを守り、育て、伝えるために、1991年には開園当時の小禽舎を生息地の自然環境を意識し、秋田の森を代表するブナを植え、人が近づけない崖地をイメージした大型猛禽舎に改修しました。この年は、ゾウ・キリンの展示が始まった年で歴史上の変換期でもありました。完成した大型猛禽舎では、人工授精やペア組み替えなど、種保存の取り組みが精力的に行われました。2003年には大森山として初の自然繁殖に成功、2006年には親鳥と飼育員の子育て（人工育雛）を併用する「ローテーション育雛法」を編み出し、産卵した3個を全てふ化させ3羽とも巣立たせる快挙も成し遂げました。2010年には園内繁殖未経験ペアへの有精卵移動による繁殖を成功させ、さらに2012年に有精卵を盛岡市動物公園へ、13年にはいしかわ動物園へと長距離輸送を経てふ化繁殖成功へと導くことができました。これは秋田の自然との関わりを持ち続けようという大